

「14万4千人」を改めて検証する

ここでは、啓示7章に出て来る「14万4000人」と呼ばれる人々について検証してみたいと思います。

この数が、天に召される「油注がれたクリスチャン」の総数（実数）であると言われていることについては、別の資料「表象物にあずかる人々に関する考察」をご覧ください。

そこでは、果たして2000年も間に本当にわずかそれだけのクリスチャンしかいなかったのかどうかを論じています。また、アブラハムの胤が少数の人々であると言われている事の聖書的反証としては、さらに別資料「アブラハムの胤は小さい群れですか」をご覧ください。

さて、本題ですが、まずこのテーマに関する聖句を挙げておきましょう。

（啓示 7:2-4）「み使いが日の昇る方角から、生ける神の証印を携えて上って行くのを見た。彼は、地と海を損なうことを許された四人のみ使いに大声で叫んで こう言った。「わたしたちが、わたしたちの神の奴隷たちの額に証印を押してしまうまでは、地も海も木も損なってはならない」。そしてわたしは、証印を押された者たちの数を聞いたが、それは十四万四千であり、イスラエルの子らのすべての部族の者たちが証印を押された。」

まず「証印」ですが、これは新世界訳の表現で、他の訳では「刻印」とか「印」などと訳されていますが、原語の意味は単に「印」「しるし」です。一般に、これは「油注がれた者（聖霊）を確証するしるし」と解されていますが、しかし、聖句では、何のための印なのか、どれほどの意味があるしるしなのかは何も示されていません。これが、油注がれた者が全員受けることになる（これがないとクリスチャンと認められない）しるしなのか、それともある限られた人々に対する特別なものなのかもわかりません。ともかく、「何らかの」しかし重要なしるしなのでしょう。

しかし、注目できるのは、これから「証印」を受ける人は「私たちの神の奴隷たち」なのです。言い換えれば、「証印」を押された故に「神の奴隷」という立場が確定したと言うものではありません。バプテスマを受けていない人が神の奴隷と呼ばれることはありません。

すでに「神の奴隷」つまり油注がれたクリスチャン以外の何者でもないと思える人々に対して「証印」を押しているのです。

霊によって「主の日」の来ていたヨハネは、証印を携えたみ使いが上って行くところから、その終わりまでを見ているということです。この記述から読み取れるのは、「損なう」事が開始される前までに、証印を押し終えるということであり、ヨハネは、その数を「聞いて」書き記しているだけで、自分で数えたわけではありません。

はっきりしているのは、「艱難」の前に全員押され終わったということであり、いつからこの特別な証印を押すことが開始されたのかは分からない。ということです。

しかし、この記述が、とりわけ終末期の時期に注目にあたいする特別な何らかの目的に適った業であろうと思えるのには、次の理由も挙げられます。

「天の王国」と「王国を受け継ぐように」という招待こそがイエスの伝道の主要な目的でしたから、キリストの話のほとんどはそのことに尽きますが、それなのに14万4,000人の数字についてイエスご自身が語られたことは一度もありません。なぜでしょうか。

そもそも王国が14万4,000人に限定されるという教えは聖書のどこに書かれているのでしょうか。どこにもありません。聖書中の十四万四千人に関する言及は前述の他に次の14章の1カ所だけです。では、次に14章の方の内容についても考慮してみましょう。

（啓示 14:1）「子羊がシオンの山に立っており、彼と共に、十四万四千人の者が、彼の名と彼の父

の名をその額に書かれて立っていた。」

2カ所しかない144000人に関するもう一つのこの14章の記述では、出来事のタイミング、時系列から言って、彼らは、「神の裁きが到来した」というみ使いたちの警告が発せられる前にすでに天にいと描写されているで、「証印」が押され終わると、直後に彼らは天に移され、艱難を経験しないということが分かります。

さて、再び「14万4000」の数字の話に戻りますが、この数字は啓示の中だけに出て来る数字です。福音書や他の書簡には、王国を受け継ぐ人が限定された人数であることなど、誰も匂わすことさえしていません。

そして何より、油注がれた者（すなわちクリスチャン）としての希望、その立場、将来のビジョンなど、もちろん未知の部分がありますが、どの部分も決して「秘儀」とされているものではないということです。実際すべてにわたり、様々な、例えば、説明で明確に伝えられています。

福音が伝えられ、人々をキリストの弟子とする業、そしてそれにバプテスマによって応えた人は神の油注ぎを受けるとするのは、「事物の体制の終結」にいたるまで、続けられて行くもので、この事に関して、その中に、秘しておかなければならない要素があると言える聖書的な理由は見いだされません。つまり、「14万4000人」は確かに「預言」そして「秘儀」ですが、上記の意味で、クリスチャンとなった人が霊の証印を受けるとするのは、歴史的な日常の出来事で、何も「預言」の成就などではないということです。この区別をはっきりと認識することは重要です。

それを区別せず、「14万4000人」の預言の中に、すでに確立されたものを崩して、全部をひっくり返して混ぜた上で、改めてその全てを預言（秘儀）として再構築しようとするので、混乱が生じるのです。

したがって、やはり、すでに「神の奴隷」となっている人のうちの「14万4000人」は、終末期に成就する預言に関係した、何か特別な目的のための、あるいは人々のための、「証印」であるということでしょう。それ故に、彼らは天に上げられる人々の中の「初穂」と呼ばれているのでしょうし、「地から買い取られた14万4000人」だけが経験する何らかの理由で、彼らだけの特別な「新しい歌」を歌うことになるのでしょう。

而して、その実体は何かということになると思いますが、これからは、恐らくこうだろうという私見ですが、ここで、考慮するキーワードは「初穂」「12の倍数」「イスラエルの全ての部族」です。

地から買い取られる、クリスチャンたち、つまり、「花嫁」「王国また祭司」となる人々ですが、その完成された姿が「新しいエルサレム」です。なぜ彼らが地から買い取られるか、それは「地に下って来る」ものだからです。そこで彼らは1000年だけでなく永遠に過ごします。

（啓示 22:5）「そして彼らは限りなく永久に王として支配するであろう」

さて、その「新しいエルサレム」を見てみましょう。これは千年が終わった後の記述です。

「聖なる都市エルサレムが、天から、神のもとから下って来るのを、見せてくれた。そして、門のところには十二人のみ使いがおり、イスラエルの子らの十二の部族の名が書き込まれていた。その都市の城壁にはまた十二の土台石があり、それには子羊の十二使徒の十二の名があった。」（啓示 21:10 - 14）

「その都市は四角であり、その長さは幅と同じである。また彼は葦でその都市を測ったが、一万二千ファーロングであった。その長さ、幅と高さは等しい。また、彼はその城壁を測ったが、

百四十四キュビトであった。第一の土台は碧玉、第二はサファイア、第三は玉髄、第四はエメラルド、第五は赤しまめのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髄、第十一はヒヤシンス、第十二は紫水晶であった。また、十二の門は十二の真珠であり、門の各々が一つの真珠でできていた。(啓示 21:16 - 21)

長くなるので一部省略して抜粋しましたが、啓示の書は、とりわけ、シンプルに書かれており、千年の事も一行ですましているにも関わらず、「新しいエルサレム」については、不思議なほど、細かい描写がなされています。正直、今この時に、こんな詳しい描写が何の役に立つのだろうと思うくらい、他に比べて、長い記述です。

さて、もうお気づきだろうと思いますが、出て来る数はすべて12の倍数です。

そして、千年王国が終わった後でさえ、一世紀の「十二使徒の十二の名前」がその土台に刻まれています。

余談になりますが、十二使徒のうち、落ちたユダの代わりに、くじによって加わったのが「マッテヤ」という人ですが、この人については、このくじの場面で二度名前だけが登場する人で、どこの誰で、どんな人なのか、その後何を行ったのか、まったく出て来ませんが、この永遠に続く「新しいエルサレム」の土台にその名前が書き込まれる一人です。

そうです。どこまで行っても彼らは特別なのです。なぜなら彼らは弟子たちの「初穂」だからです。この12人を土台にして、会衆は造られ、発展してきたのです。

さかのぼって、この都市の12の門にはイスラエルの十二の部族(ヤコブの12人の息子に基づく)の名が書き込まれています。

そして城壁は144キュビトです。「新しいエルサレム」は象徴的な「十二」を基礎に据えられているのです。つまり、14万4000人は「新しいエルサレム」のベースという特別な目的のための、「証印」を押されたということでしょう。

つまり彼らのほとんどは、終末期に生きている、ユダヤ人クリスチャンたちから選ばれたもので、その数は実数といって良いと思います。

(マタイ 19:28 - 30) イエスは彼らに言われた、「再創造のさい、人の子が自分の栄光の座に座るときには、あなた方自身も十二の座に座り、イスラエルの十二の部族を裁くでしょう。…しかし、多くの最初の者が最後に、最後の者が最初になるでしょう。」

まさしく、最後の彼らが初穂になり、最初の者がその後になるのです。

(これらについての詳しい事は別ファイル「34 復活の種類と時についての考察」をご覧ください。)

「ものみの塔」誌では、生来のイスラエル民族とクリスチャンを明確に分けて考えます。もちろんそれ自体は間違っていないと思います。しかし、クリスチャンをさらに「霊的イスラエル民族」(14万4,000人)と「大群衆」の2つに分類していますが、それは本当に聖書に基づいているのでしょうか。少なくとも聖書中にある表現としては「神のイスラエル」という表現は、たった1カ所ガラテアの中でクリスチャン会衆をさして用いられていますが、「霊的イスラエル」という表現はありません。

生来のイスラエル人のクリスチャンと異邦人からのクリスチャン双方からなる「アブラハムの胤」のことを呼ぶなら聖書に従って「神のイスラエル」と表現するのが正しい。

「ものみの塔」は、では、誰を「霊的イスラエル」と呼んでいるかと言うと、クリスチャンとなった人のうち先着順、144000名様までの人々を「霊的イスラエル」「油注がれた者」と呼んで、それ以降のクリスチャンを区別しています。

しかし聖書中のどこを見てもクリスチャンに二つのグループがあることなど記されていません。

キリストが教えられたのは、つまり本当のキリスト教は「一つの群れ、一人の羊飼ひ」ということです。

ものみの塔の正式教理である、いわゆる「霊的イスラエル」と「大群衆」はそれぞれ、神から見た立場も、希望も、あるいは特権も、全く異なったものですから、これをどう説明しても、この二つは決して「一つの群れ」と言えません。なぜなら、群れが一つである以上、「こちらから向こうへ」行くことができなければ「ひとつ」ではないからです。

しかしこの両者は絶体に超えられない壁で仕切られています。その壁はどのくらい高い、どれほどの違いかという、単なる比喩ではなく文字通り天と地の違いがあります。これには「ほど」という副詞すら付きません。何と何が異なるかといって天と地の違いは最上級の表現で、これ以上の表現は存在しないという違いです。これほど隔てられたものはありません。これがどうして同一のグループと言えるのでしょうか。

「書かれている事柄を超えている」ことが明白な聖書解釈です。

さて、キリストに信仰を働かせて献身したクリスチャンたちは文字通り「一つの群れ、一人の羊飼ひ」と表現されることになります。

しかし、聖書は多くのところでこの両者を区別しています。とは言っても差別ではありません。その「区別」とどういふものかと言いますと、エホバがアブラハムと結んだ契約が関係してきます。ローマ人への手紙11章全体をよーく読むとそれがはっきりと理解できます。これから暫く、ローマ書からその点を見てみることにしましょう。

まず、パウロは生来のイスラエル人をどうみなしたか。を考えます。

「わたしの心には大きな悲嘆と絶えざる苦痛があります。わたしは、自分の兄弟たち、肉によるわたしの同族のために、自分自身がのろわれた者としてキリストから引き離されることをさえ願うのです。」(ローマ 9:2-3)。

こんなことを聖書のなかで言ってしまうても良いのでしょうか

(マタイ 10:37) …わたしに対するより父や母に対して愛情を抱く者はわたしにふさわしくありません。また、わたしに対するより息子や娘に対して愛情を抱く者はわたしにふさわしくありません。

このキリストの言葉をよく知っていたはずのパウロが上の言葉を述べていることを考えると、いかに肉のイスラエル人の霊的な福祉を願っていたかその思いの強烈さが伝わってきます。

西暦一世紀に、ユダヤ人はまことのメシヤを拒みました。イエスを釘付けにして、悔い改めなかった、生来のユダヤ人は永遠に棄てられてしまったのでしょうか。「ものみの塔」はそういう見解ですが、パウロはそのことについて何と述べているのでしょうか。

「では、わたしは言います。神はご自分の民を退けられたわけではないでしょう。断じてそのようなことはないように！わたしもイスラエル人であり、アブラハムの胤の者、ベニヤミン部族の者だからです。」(ローマ 11:1)

では、いつユダヤ人が回復するかについて鍵となる聖句を見てみよう。

(ローマ 11:11) …そこでわたしは尋ねます。彼らはつまりいて全く倒れてしまったのですか。断じてそのようなことはないように！しかし、彼ら(ユダヤ人)の踏み外しによって諸国の人たち

に救いがあるのであり、それは彼ら（ユダヤ人）にねたみを起こさせるためです。

（ローマ 11:25 - 26）…兄弟たち、あなた方が[ただ]自分の目から見て思慮深い者とならないために、わたしはあなた方がこの神聖な奥義（秘められた計画）[新共同訳]について無知であることがないようにと願うのです。すなわち、諸国の人たちが入って来て[その人たちの]数がそろそろまで、感覚の鈍りがイスラエルに部分的に生じ、こうして全イスラエルが救われることです。

（ローマ 11:29）…神の賜物と召しとは、[神]が悔やまれる事柄ではないからです。
（神の賜物と招きとは取り消されないものなのです）[新共同訳]

（ローマ 11:30 - 33）…あなた方（異邦人）がかつては神に不従順で、今は彼ら（ユダヤ人）の不従順のゆえに憐れみを受けているのと同じように、彼ら（ユダヤ人）がいま不従順になってあなた方（異邦人）に憐れみが及んでいても、それは彼ら（ユダヤ人）自身も今や憐れみを受けるためなのです。神は彼ら（ユダヤ人）すべてを共に不従順のうちに閉じ込め、こうしてそのすべてに憐れみを示そうとされたのです。ああ、神の富と知恵と知識の深さよ。その裁きは何と探りがたく、その道は[何と]たどりがたいものなのでしょう。

簡単に説明するとユダヤ人がかたくなになって踏み外した（つまりクリスチャンになり損ねた）のを神が許されたのには、二つの目的がありました。一つはそれによって異邦人に道が開かれた、そしてそれによってユダヤ人にねたみが生まれ、「異邦人への解放」の 때가満ちたときに悔い改めて再びアブラハムの胤となる道が供えられ「こうして全イスラエル（肉のイスラエル人）が救われる」ことを望まれた、あるいは、もくろまれたということです。

ですから、当初からの神の賜物と召しは永遠不変だということで、確かにこれほどまでのアブラハムとの契約に対するこだわり、忠節（神が人間に忠節ということはありませんが）とも言える神の思いは確かに何と探りがたく、その道は[何と]たどりがたいものなのだろうと思います。パウロはこのエホバの思いと同じような感情を持っていたからこそ「わたしは、自分の兄弟たち、肉によるわたしの同族のために、自分自身がのろわれた者としてキリストから引き離されることをさえ願うのです。」と述べたのでしょう。

さて、このことから、肉のイスラエルからのクリスチャンと異邦人からのクリスチャンが区別されていると、先ほど書いた理由がお分かり頂けるでしょう。

前述（3頁目）に「霊的イスラエル」というものは存在しないと述べましたが、「エルサレム」についても地上のエルサレムではない「エルサレム」については「生ける神の都市なる天のエルサレム」という表現が1回（ヘブライ 12:22）、「上なるエルサレム」という表現が1回（ガラテア 4:26）、「神のもとから下る新しいエルサレム」という表現が2回（啓示 3:12）で、聖書中に合計4カ所記されています。

さてこのうち「天のエルサレム」というのは文字通り天にあるエルサレム、すなわちキリストと従属の王たちからなる「王国」のことに他ならないでしょう。

そして「新しいエルサレム」、これは神の下から新しい世（地）へ下ってくるのですから、表現としては比喩的に語られていますが、霊的なものと言うよりキリストの支配の下にある文字通りの新しい地上のエルサレムの平安、秩序、歓びに満ちた生活の場といった様子を描写したものでしょう。

そしてもう一つの「上なるエルサレム」というのは、実体のある霊的な性質の「エルサレム」と言ったものではなく、この聖句の前後の描写がそうであるように一つの「例え」、比喩的な「エルサレム」ということでしょう*これに付いては巻末の資料をご覧ください。

従って「エルサレム」についても例外的な4カ所以外の「エルサム」は文字通り地上のエルサレム以外の何かを表していると言える確かな聖書的根拠は何も見いだされません。つまり上記の例外を除いて聖書中に「エルサレム」と書いてあったら、それらは全て今日ある中東の地上のエルサレムの場所を指すと受け取って何ら問題はないということです。

そこで改めて先ほどのパウロのローマ人への手紙にもどります。

それは11:25の「諸国の人たちが入って来て[その人たちの]数がそろうまで、感覚の鈍りがイスラエルに部分的に生じ、こうして全イスラエルが救われることです。」という部分です。ここで異邦人のためにあらかじめ定められた人数が揃うまで、肉のイスラエルがかたくなであるというような意味に訳されていますが、他の翻訳や、前後の文脈、また聖書中の他の内容と比較して考慮すると、ここでパウロが述べているのは、「異邦人の定められた時」が満ちると、それは終了し、最終的に肉のイスラエル人に恵みが注がれることになっている。と理解すべきものようです。

つまり、不従順なユダヤ人の「枝」は切り落とされて無割礼の異邦人にとって代わった。(アブラハムの根に接ぎ木された) しかし「終わりの日」に異邦人に対する神の恵みが達成する(終了)と、イスラエルの回復(再接ぎ木)が再び始まるという啓示であるということです。

正に、終わりの日の最終部分で「異邦人の定められた時が満ちたとき」に踏みにじられることも終わり、最後の最後に望みをかけることが期待されるのでしよう。

そして「そしてわたしは、証印を押された者たちの数を聞いたが、それは十四万四千であり、イスラエルの子らのすべての部族の者たちが証印を押された。と述べる啓示 7:4 が成就することになるのでしよう。

その時12部族の各部族から等しく12000人ずつ証印を押されるはずであり、いわゆる「霊的イスラエル」なる人々がただ単に総数だけで、どこの誰がどの部族からと言うことで、そこから何人が証印を押されたかの詳細は誰にも分かりようがない状態では、こんなにきっちり詳細に、敢えて言えば、「各部族から」で済む話を、〇〇から12000人としつこく描写している意味がまったくなくなってしまうこととなりますから、やはり聖書中の細かな描写は無駄な描写ではなくしかるべき意味のあることとみなすべきではないでしょうか。

結論：油注がれた人々のうち「初穂」として、また新しいエルサレムの土台を担う特別に選ばれた14万4千人と、「第一の復活」によって天に上げられる「死んで眠っているクリスチャン」たち、そして3時半「野獣に渡される」終末期のクリスチャン(復活と携挙)から構成されると言えます。

「上なるエルサレムとは何ですか」

(ガラテア 4:22-26)「アブラハムは二人の子を得たと書いてあります。ひとは下女により、ひとは自由の女によってです。しかし、下女による子は実際には肉の方法で生まれ、自由の女による子は約束によって生まれました。これらの事は象徴的な劇となっています。この女たちは二

つの契約を表わしているからです。一方はシナイ山から出ていて、奴隷となる子供たちを生み出すもの、すなわちハガルです。そこで、このハガルは、アラビアにある山シナイを表わし、今日のエルサレムに当たります。彼女は自分の子供たちと共に奴隷の身分にあるからです。それに対し、上なるエルサレムは自由であって、それがわたしたちの母です。」

この記述は反意語で対になっています。

「自由の女」 — 「下女」

「サラ」 — 「ハガル」

「自由」 — 「奴隷身分」

「上なるエルサレム」 — 「今日のエルサレム」

さて注目すべきなのは「今日のエルサレムに当たります」という表現です。

もしこれが「地（上）のエルサレムです」となっているなら、「上なるエルサレムは」天に存在すると考えて良い理由になりますが、しかし、「上なる」とは何かを考える際、その反意語として用いている「今日の」という表現から、パウロがどういう思考を働かせて「上なる」という表現を使ったかが読み取れるということです。この表現は、エルサレムの「場所」を問題にしているのではなく、「時」もしくは「時代」を問題にしていることがわかります。パウロが場所を意識していたなら「上なる」に対して「地上の」という意味の言葉で表したはずだからです。

「エルサレム」という都市自体が、どの時代も終始一環、奴隷身分にあるわけではありません。

明らかに1世紀の時点では、そうした状態に陥っていたということです。

ここで、イエスの語られた「異邦人の定められた時が満ちるまでエルサレムは踏みにじられる」という言葉を思い起こします。

そしてその時が満了するとエルサレムは回復し、神の恵みが再び復活するという約束に基づいています。

従って、パウロがガラテアで引用したイザヤ54章の記録からも分かるように真のアブラハムの胤は約束によって産まれるわけですから、胤を産み出すエルサレムは、最終的に回復の約束が成就した時点でのエルサレムと言えます。踏みにじられたエルサレムではなく解放された自由を謳歌するエルサレムであるはずで。

「上なる」と訳されるギリシャ語は単に「上」という意味であって、上方、上位のもしくは高められたと言うことであり、必ずしも天を指すわけではありません。実際「天に」にあるエルサレムの場合聖書は「天のエルサレム」という表現を用いています。

「上なるエルサレム」とはみ使いたちであるという説明になっていますが、み使いたちが「母」の役割を果たしたといえる記述はどこにもありませんし、「女」あるいは「妻」という表現、さらには、み使いに対して「夫」と呼ばれる者も聖書中にありません。

この「上なる」という表現は、人間の意志、肉的な方法、という事柄に対応したもので、約束による神の霊的な方法によるものが、胤の母であるということです。

従って、表現すれば、「より高い次元の」ものという意味合いであろうと思われる。そして具体的な意味は「約束が成就する将来」という意味あい使われていると考えることができるのではないのでしょうか。

「今日のエルサレム」の反意語を挙げるとすれば、「将来のエルサレム」でしょう（過去と言うことはありえないので）すなわち「上なるエルサレム」は「諸国民からの踏みにじり」から解放された後の、「地上のエルサレム」を指すと言って良いでしょう。